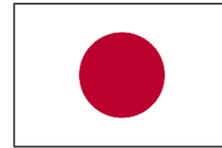




Zikomo !!



Vol.4 2015年11月発行

東大和市の皆様 Muli Bwanji（こんにちは）！狭山出身の橋本裕保（はしもとゆうほ）と申します。

マラウイでの2年間の任期を終え、先月末に日本に帰国しました。世界最貧国の一つと言われるマラウイで2年間暮らしていたので、コンビニ、時間通りに出発する電車やバス、夜でも出歩ける環境など、日本では当たり前なのに感動しながら日々過ごしています。

本号では、Vol.3でお伝えしたマラウイの大雨被害に対する活動のご報告と、マラウイでの2年間の活動を終えた感想、そして青年海外協力隊という仕事についてご紹介いたします。最終号です！



■マラウイの大雨・洪水被害■

2015年1月上旬から中旬にかけて、マラウイ南部で大雨が降りました。これによって洪水が発生し、家が流されたり畑の作物や家畜が流されるなど甚大な被害が発生してしまいました（NHKやYahooのニュースでも取り上げられていました）。私の住んでいた地域では洪水被害はありませんでしたが、多くの家や学校が壊れ、畑の作物が流されてしまいました。この状況を踏まえ、近隣の地域にいた隊員と協力をして、復興支援の一環として壊れてしまったNursery school（日本で言う幼稚園や保育園）の新校舎を建設しました。



壁が壊れてしまった Nursery school

◆なぜ幼稚園の修復なのか

復興支援活動を行うにあたり、初めは被害の大きい村を1～2村選んで、その中の壊れてしまった全ての家を修復するつもりでいました。しかし、それではお金と時間がとてもかかってしまうこと、そして村人の『妬み』を引き起こしてしまう恐れがあることから、公共施設である幼稚園の修復に行き着きました。

『妬み』と言われてもピンとこないかもしれませんが、マラウイにいる協力隊の間では度々上がるキーワードでした。仮に私たちが壊れた家の修復支援を始めたとなると、「隣の家よりも私の家の方が被害が大きいのに同じ支援しかしてくれない」と主張して問題を起こす人が現れたり、支援をしてもらってより良い家になりたいがために自分で家を壊す人などが現れる可能性があります。妬みから、修復した家を近所の人壊してしまうという可能性もありました。私たち協力隊が現地生活するのはたったの2年間。私たちの帰国後に、現地の人同士の争いの原因になるような事はしない方が良い、と考え、幼稚園の修復を行いました。



大雨で壊れてしまった家

◆修復支援の様子

今年の5月から新校舎の建設作業を開始して、8月下旬に完成しました。現在は新しい校舎で子ども達が勉強をしています。

新校舎の建設に必要な資金は日本円で約15万円でした。このお金は『日本マラウイ協会』という団体のマラウイをサポートするプロジェクトに申請して支援をしてもらいました。作業開始前に村でミーティングを開いてもらい、私がサポートをするのはセメントや屋根の鉄板など村人が購入できない資材の購入のみで、建設作業や村で準備できる資材（壁に使うレンガなど）は村人の責任で進めてもらうように話をつけました。

建設作業は、壊れてしまった校舎の横の草原を整備することから始まり、レンガの組み上げ、屋根の設置と進んで行きました。



資材搬入の様子



レンガ組みの様子



完成した校舎

建設が始まった直後は順調に作業が進み、「このままで行けば6月末には完成する！」と村長からは言われていましたが、頻発する葬式などで予定が遅れ、完成したのは結局8月末でした。予定よりも2ヶ月遅れと言われるとかなりの遅れのように感じますが、のんびりしていて時間にルーズなマラウイなので、「私が帰国する前に無事に完成して良かった！」と感じています。

◆新校舎で学ぶ子どもたち

9月に入ると、新校舎で子どもたちが学習を始めました。午前中は幼稚園の子ども達が毎日やって来て、午後には週3回小学校低学年の生徒達が学校の補習授業を受けにきます。



新校舎での授業の様子



村長さんからのお礼メッセージ

頑張ったのは村長を始めとする村人達ですが、途中で色々な問題が起きたことを考えると、「無事に完成して良かったなあ」と感じます。

■マラウイでの2年間を終えた感想■

マラウイでの2年間の活動では、村人に対して以前に教えた農業技術が普及しているかの確認と、そのさらなる普及を目指して活動をしてきました。村を巡回して村人を巻き込んだミーティングの実施、トレーニングや勉強会などを実施してきました。しかし、振り返ると上手くいったことよりも上手くいかなかったことの方が多かったです。そういったこれまでの活動から学んだことは次の3点です。

①こちらがやりたいことが村人のやりたいことではない

ミーティングやトレーニングを何度も企画しましたが、「忙しいから」、「葬式があった」、「理由は分からないけど人が集まらない」といったことが多くありました。

よく考えてみると、村人たちにはそれぞれの生活があり、日々やるべきことがあります。私がやろうとしていたことは、今すぐに彼らにとってプラスになることではなかったため、優先順位が低くなってしまっても当然かもしれません。村人が今課題だと感じていることは何なのか、私に何をしてもらった



ら嬉しいのか・・・私がやりたいことに着手する前に、こういった彼らのニーズをもう少し汲み取れていれば結果は違ったかもしれません。『相手の目線に立って考える』ということの大切さを改めて学ぶことができました。

②信頼関係を築くことが基本

マラウイに赴任してからの1年間は活動の進捗もほとんどなく、「本当に私は必要とされているのだろうか・・・？」と不安になることが何度もありました。配属先では同僚とおしゃべりばかりで一緒にフィールドには行けず、一人で村を訪問しても村長さんたちとおしゃべりをしてご飯をごちそうしてもらって子ども達と遊んでから帰る、といった日々でした。当時は「これでいいのだろうか？」と悩みもしましたが、今振り返ると巡回先の村人たちと信頼関係を築くために



必要な時間だったのだと感じます。この期間があったからこそ、2年目には村長さんに色々な提案ができ活動することができました（①に書いたように、上手くいかないことはたくさんありましたが・・・）。

生活習慣も考え方も違う途上国の国では、現地の人々の生活スタイルに合わせて仲良くなるということが大切だったんだなと感じます。

③諦めないで動き続ける

一番感じたのはこれです。上に書いたように、上手くいかないことがたくさんあり「日本に帰りたい」と思ったことがたくさんありました。しかし、諦めないで試行錯誤を続けたことで最終的にはそれなりに活動することができました。「意味がない！」と思って同僚とのおしゃべりの日課を辞めてしまったり、一人で村を巡回することを諦めて



いたら、何も達成できずに2年間を終えてしまったと思います。「今取り組んでいることが必ず今後につながる」という気持ちを持って、些細なことでも諦めずに取り組み続けるという気持ちを持ち続けることが大切だということを学びました。

私がマラウイで学んだ3つのことは日本でも当たり前のことかもしれません。「日本だから」とか「途上国だから」ということに関係なく、大切なことはどこに行っても大切なのだと思います。

■青年海外協力隊という仕事■

『青年海外協力隊』と聞くと、どんなことを思い浮かべますか？

「途上国の過酷な環境で頑張っている」、「アフリカで井戸を掘る仕事」、「よく分からないけれどたくましい」、「外国語を流暢に話せる」、などなど色々なイメージがあるかと思います。何だか自分とは関係のないことに思われるかもしれませんが、そんなことはありません。健康で、途上国に興味がある人ならば誰でもなれる可能性のある仕事です。(試験があるので、誰でもなれるというのは言い過ぎかもしれませんが、意外にも身近な職業だということを伝えたいです！)

私は青年海外協力隊になりましたが、途上国に関心のある普通の人です。

農業や自動車整備など、専門的な知識が必要な職種もありますが、「コミュニティ開発」や「青少年活動」といった職種は専門的な知識がなくても大丈夫な職種です。メディアで見聞きする途上国と実際に自分でみる途上国は違いますし、日本とは全く違う環境の途上国で生活して仕事をすることで視野が広がって自分の枠が広がっていきます。

私の経験を発信することで、多くの人が日本とは遠く離れた途上国や青年海外協力隊という仕事に興味をもっていただけると嬉しい限りです。今後、私は専門性を身につけるためにイギリスの大学院に留学し、その後も途上国の発展に関わる仕事がしたいと思っています。

この記事のタイトルである「Zikomo」とは、マラウイの現地語で「ありがとう」を意味する言葉です。これまで「Zikomo!!」をお読みいただきありがとうございました！

Zikomo !!

■ブログの紹介、連絡先■



ご感想、ご意見、ご質問などは下記までご連絡ください！

青年海外協力隊 マラウイ派遣

橋本 裕保 (はしもと ゆうほ)

メール：yuho.hashimoto3@gmail.com

★ブログを書いています！！

『とべ、UFO！ ゆうほの協力隊ブログ』
<http://tobe-ufo.com/>